

近世日本におけるウズラの飼育書

—「鶉目利問答書」「鶉書」「喚子鳥」を中心に—

本田 歩 美

はじめに

現在日本では、犬や猫、魚や爬虫類など様々な動物がペットとして飼育されている。中でも犬、猫は日本の一五歳未満の人口をはるかに上回る数が飼育されており^一、それだけペットが身近な存在であることが確認できる。ペットを飼う理由はさまざまであるが、動物が好きだから、気持が和らぐからといった声が多くあげられる。^二

このようなペットブームに伴い、様々なペット関連の書物が書店に並んでいる。飼育書もその一画を占めており、初めてペットを飼う人や病気やけがの対処法を知りたい人など、ペットとより良い関係を築くめには必要不可欠な代物といえるだろう。ここで歴史に目を向け、その発想や営為の源泉を訪ねると、近世前期から様々な動物の飼育書が刊行され始めた事実に行き着く。

そもそも愛玩を目的として動物が飼育され始めたのは近世に入ってからである。安定した生活により時間と暮らしに余裕が生まれ、趣味や楽しみの一つとしてペットを飼うようになった。確かにそれ以前からも鷹や馬の飼育は盛んに行われていたが、これらの動物は政治と強く結びついて人間に使役されていたため、愛玩を目的として飼われた動物とは別物である。^三

そうした中、初めてペットの飼育書として刊行されたのが『鶉書』である。近世において、美麗な姿や声で人を和ませる鳥類は非常に人気があり、野鳥や外国の珍しい鳥を集め図画に残す大名や旗本もいた。また囀りや羽色の美しさなどを競う小鳥合は、大名から庶民に至るまで身分を超えて人気を博した。^四多くの鳥の図画を残している曲亭馬琴は『吾仏乃記』に次のように記しており、この状況の一

端を窺い知ることができる。

文化年間、戯墨壮りに行はれて一日も休暇あることなれば、折々逆上して口痛の患あり。一日、心ともなく思へらく、吾今、筆硯の為に繁れて保養に由なし。小鳥などの活物を坐右に在らせて、常にその運動を見るならば、気を散じて宜しかるべしと思ひしかば、文化十年癸酉の夏の比、紅鷺一隻を求得て、其籠を書斎の窓に掛けたりしに、終日よく鳴けば、聊保養にならざるにあらず^五

簡単にまとめると、文化年間、馬琴は一日も休むことなく戯作を書かなければならず、精神的にも疲労がたまり、時々言葉で人に八つ当たりしてしまふこともあった。このような状況では心が休まることがないため、小鳥などの生き物をそばに置き、いつもその動きを見れば気も紛れてよいだろうと思ひ、一羽の紅鷺を手に入れる。その籠を書斎の窓に掛けてみると、一日中よく鳴きまあまあ保養になったと満足するのである。今も昔もペットに癒しを求めるところに変わりはないようである。

ところが現代においては、ペットブームに伴い必要以上に繁殖を行うことで、売れ残った動物が殺処分されたり、

アクセサリー感覚でペットを飼育したりと、人間本位の行為が横行している。このような状況では、ペットとよりよい関係を築いているとは言い難い。

以上を踏まえて、歴史的視点をもって人とペットとの関係を再考するべく、小鳥合わせで人気を博し、身分を問わず広く飼育されていたウズラに焦点を当て、管見の限り日本で最初に刊行された飼育書である『鶉書』、そして同じ著者により成された「鶉目利問答書」、「喚子鳥」を研究対象とした。本稿では、「鶉目利問答書」と『鶉書』の差異を比較し関係性を探ること、そして近世に刊行されたウズラの飼育書を通して、ウズラに対する眼差しの変遷を描くことを目標とする。

一 文献にみる鳥と人のかかわり

一（一）古代・中世の鳥と人

近世のウズラの飼育書について踏み込んでいく前に、まずはそれ以前のウズラやその他の鳥がいつ頃から飼われ始め、どのように人と関わっていたか、その沿革を探っていく。

鳥の文献における登場は古く、『古事記』の時代にまでさかのぼる。その多くは神の使いや信仰の対象として描かれており、鳥が神聖視されていたことが窺える。一方、『日

本書紀「雄略天皇七年八月条には雄鶏同士を戦わせる闘鶏の記載がある。

八月、官者吉備弓削部虚空、取_レ急帰_レ家。吉備下道臣前津屋或本云、国造吉備臣山。留_二使虚空_一、経_レ月不_レ肯_レ聴_二上京都_一。天皇遣_二身毛君大夫_一召焉。虚空被_レ召来言、前津屋以_二小女_一為_二天皇人_一、以_二大女_一為_二己人_一、競_レ令_二相闘_一。見_二幼女勝_一、即拔_レ刀而殺。復以_二小雄鶏_一、呼為_二天皇鶏_一、拔_レ毛剪_レ翼、以_二大雄鳥_一、呼為_二己鶏_一、著_二鈴・金矩_一、競_レ令_二戰_一之。見_二禿鶏勝_一、亦拔_レ刀而殺。天皇聞_二是語_一、遣物部兵士三百十人_一、誅_二殺前津屋并族七十人_一。六

要約すると、吉備下道臣は体が小さく羽をむしられた鶏を天皇と見立て、体の大きく強そうな鶏を自分と見立てて闘わせ、それでも勝ってしまった天皇の鶏を殺すことにより天皇を呪詛するのである。このように、古代における闘鶏は神事の延長であり、吉兆を占うなどの目的が主と考えられているため、宗教的な色合いが強い。七

娯楽の一つとして鳥が飼われ始めるのは平安時代に入ってからである。経済と時間に余裕のある貴族階級が生まれ、それが理由の一つだろう。この時代になると野鳥の姿や

声を楽しむ様子が語られるようになる。八清少納言による『枕草子』の「うつくしき物」の段では、鶏の雛の愛らしさについて語られている。

庭鳥の雛の、足高に、しろうをかしげに、衣みじかきなるさまして、ひよくと、かしがましようなきで、人のしりさきにたちてありくも、をかし。又、をやのともにつれて、立ちて走るもみなうつくし。九（足が長く丈の短い着物を着ているような白くかわいらしい鶏の雛が、ピヨピヨとやかましく鳴きながら人の前や後ろに立って歩いているものかわいらしい。また親と連れ立って走っているのも皆かわいらしい。一〇）

当時の庭先と、そこで飼われる鶏の様子が窺える記述である。平安時代後期には貴族同士での闘鶏が流行しており、その影響で多くの貴族が鶏を飼っていたという。二また、同じく『枕草子』の「心ときめきする物」の段には、「雀の子がひ二」が挙げられている。『源氏物語』の若紫の巻にも飼っていた雀の子を逃がしてしまう場面がある通り、当時貴族の間では雀の雛を飼うことはめずらしくなかったようである。

さて、時代は下って平安後期になると小鳥合が行われる

ようになる。

寛治五年十月六日、殿上人・所の衆・小舎人、左右をわかつて小鳥合の事ありけり。公卿は参られず。

殿下・三位中将ばかりぞ候はれける。殿上人、左方、頭中将実朝臣、右方、宗通朝臣以下、夏の袍どもに冬の指貫をぞきたりける。左勝て殿上にとまりて、朗詠・今様・猿楽などありけり。右はみな逃ちりにけり。小鳥は後に院へ参らせられにけり。二三

小鳥合に勝つたものは昇殿を許され、催し物を楽しむことができたようである。そして勝ち上がった鳥は上皇に献上されている。『古今著聞集』承安二年五月条に公卿や侍臣、僧などを呼び行われた鴨合についての記述もあり、ここには鴨合の手順や配席、勝敗のつけ方などについて非常に細かく記載されている。ただ鳥を鳴き合わせるだけでなく、鴨の籠の周りを賢木^{一四}や色とりどりの藤の花で飾り立てたり、雅楽や和歌も同時に楽しまれている様子が描かれている。また、小鳥には無名丸、千与丸などと名前が付けられ、愛着を持つて飼われていたようだ。^{一五}

平安時代において鳥を飼うことは、貴族にのみ許された贅沢な遊びであった。そして小鳥合は、左右に分かれて競つ

ていることや、殿上人や公卿など社会的身分の高い人々によって行われている点において歌合と類似しており、勝負事の意はもちろん、同時に社交場としての役割も果たしていたと考えられる。

鎌倉時代に入ると鳩の飼育に関する記述がみられるようになる。藤原定家の日記である『明月記』承元二年（一一〇八）九月二八日条には「近年天子上皇皆好鳩給、長房卿、保教等自養鳩。得時而馳走^{一六}」とある。ここでいう馳走は食事を提供する意ではなく、「競争する」という意味である。つまり、鳩のレースが行われていたことを示す。^{一七}同じく『明月記』嘉祿二年（一二二六）二月七日条にはオウムに関する記載もある。

鸚歌と云鳥為一見也、可進殿下云々、其鳥大同鴨、色青、毛極濃柔、喙如鷹而細、食柑子栗柿等云々、喚人名由雖聞其説當時無音^{一八}

オウムが日本に舶来した最古の記述は、『日本書紀』巻第二五の大化三年条にある。^{一九}それ以降、インコやオウムは度々、朝鮮や中国から日本に送られている。立ち戻つて『明月記』嘉祿二年五月一六日条には、「伝聞、去今年宋朝之鳥獸、充滿于華洛、唐船任意之輩、面々而渡之歟、

豪家競而養くわんやう云々二〇」とある。中国から珍しい鳥獣が大
量輸入されており、それを経済力や権力の高い者たちが競
うように飼っているというのだ。鎌倉時代初期は平安時代
と比べ飼育される鳥獣の種類が増えたといえるだろう。

その後室町時代にかけて、日本で唯一家禽化に成功した
鳥といわれる、ウズラの飼育が本格的に行われるようになる。
二 戦国時代の公家、山家言繼の日記である『言繼卿記』
永祿七年（一五六四）五月九日条には「甲斐守久宗參鶉籠
仕了三三」とあり、ウズラを入れる籠が作られていたことが
わかる。同じく『言繼卿記』永祿一二年（一五六九）四月
一六日条には「自一條殿御使有之、織田所へ鶉被遣之三三」
と記載されている。飼われるだけでなく、贈答品として贈
られることもあったようだ。

一 (二) 近世の鳥と人

古代・中世では、主に貴族や上級の武士の間で見られた
飼い鳥文化であるが、近世に入ると大名から庶民にいたる
まで、幅広い身分に広がりを見せる。その主な要因は大き
く三つ考えられる。

まず挙げられるのは「平和」である。慶安事件や島原・
天草一揆などいくつかの動乱はあったものの、江戸幕府開
幕と閉幕の時期を除いたおよそ二百年間はおおむね平和な

時代であった。それにより安定した生活が手に入り、相撲
や歌舞伎、見世物といった庶民文化が開花していく。飼い
鳥文化もその一つといえるだろう。二四

また、安定した生活が手に入ることで、所得の面でも余
裕が生まれたことも大きく影響していると考えられる。こ
れが二つ目の理由である。大金持ちになれなくとも、経済
的に安定することで、趣味を楽しむ人々が増えたと考えら
れる。

最後は「専門的な情報の流通」であるが、これには二つ
の要因がある。ひとつは鳥屋の存在が挙げられる。元祿三
年（一六九〇）に出版された『人倫訓蒙図彙』の巻四によ
ると、「小鳥や」の名で次のように解説されている。「諸
の飼鳥を商あきなふ。其外鶯、鶉等の鳴鳥なぐどりを持もてば、諸方の鳥に音
付つけする也二五」。当時の鳥屋は単に鳥を売るだけでなく、鶯
やウズラなどに鳴き声の訓練も行っていたことがわかる
(図1)。

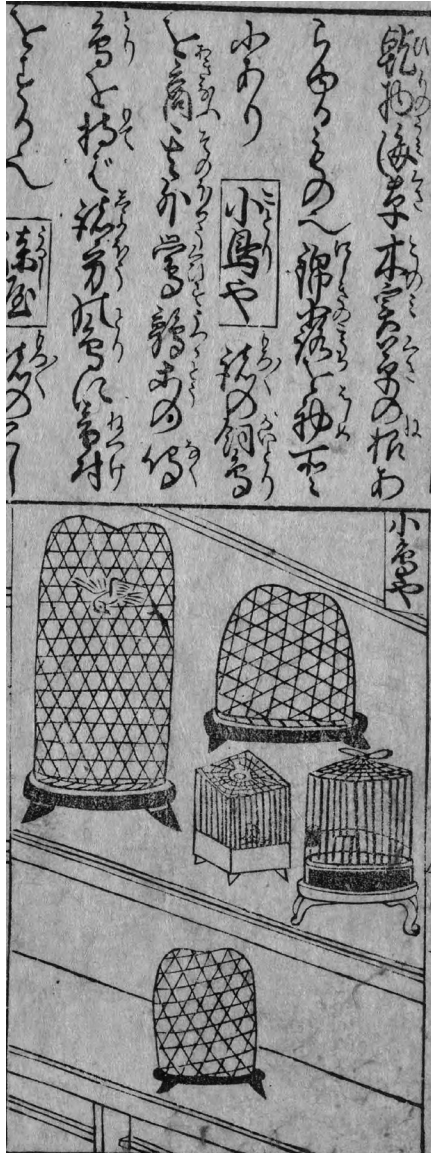


図1 近世前期の小鳥屋（蒔絵師源三郎「他」筆『人倫訓蒙図彙』巻四、一六九〇年刊、国立国会図書館
 デジタルコレクションより転載）

また鳥屋は、鳥の病気やけが、飼育方法などに関する相談役としても重宝されていた。近世後期の読本作家である曲亭馬琴の日記には、文政一二年（一八二九）五月一日条に次のような記述がある。

うへ木や金次、おく庭東之方、山梔子の枝_ニ鶯の巢有之、卵五ツ有之候。「中略」右之卵あまり赤く候間、広小路鳥や_ニて聞せ候処、鶯_ニ相違無之よし、申之。_{二六}

前後の文章も含め要約すると、奥庭のくちなしの枝に鶯が巢をかけて卵を生んでいたが、（馬琴は）確信が持てなかつたため、広小路の鳥屋に聞いたところ、鶯の卵に間違いないと答えが返ってきたというのである。このようなちよつとした相談事でも気軽に聞くことができたようだ。

馬琴の時代、江戸市中だけでも四十軒から六十軒の鳥屋があつたという。_{二七}いかに飼いが人気であつたとしても、これだけ鳥屋が軒を連ねていれば、ただ客足を待つているだけでは経営が立ち行かなくなることは想像に難くない。鳥屋にとつて、適切な飼育方法、病気やけがの対処法を身に着けることは、商品である鳥をより良い状態に保つことに役立つ、この競争市場においては必要不可欠なことであつたと考えられる。また飼う鳥の初心者や、飼育の難

しい鳥に挑戦したい者には的確な助言や指示を与えることができただろう。

近世中期に京都に住んでいた絵師西川祐信は、元文五年（一七四〇）に刊行された『絵本徒然草』の中に、鳥を商う様子の絵を描いている（図2）。武士とみられる男が腰を下ろし、主人と話し込んでいる。手前にあるすり鉢はすり餌を作るための道具であろう。馬琴の日記や、この絵の客と主人が話し込んでいる様子から、鳥屋が鳥を買うためのだけの場所ではなく、その道に精通した専門家に話を聞くことができる場でもあつたことが窺える。

では、鳥屋はどのようにして専門的な知識を身に付けたのだろうか。まず考えられるのは、代々続いている鳥屋の場合先代から仕込まれたり、作業を手伝ううちに自然と知識を身に付けたりする方法である。ところが、細川博昭氏によると、江戸時代に飼われた可能性のある鳥は、和鳥が百十八種、輸入鳥が七十種であるという。_{二八}いくら専門的な知識を持つ鳥屋といえど、すべての鳥の飼育条件や病気やけがの対処法を記憶しておくことは不可能に近く、自らの知識や経験だけでは対応しきれないこともあつただろう。

そんな時に頼りにされたのが鳥の飼育書であり、これが「専門的な情報の流通」の二つ目の要因である。近世に入



図2 近世中期の鳥屋（西川祐信画『絵本徒然草』下巻、一七四〇年刊、国立国会図書館デジタルコレクションより転載）

り鳥の飼育書が刊行されるようになってから、江戸市中には複数の飼育書が普及していたが、その一部は鳥屋によって書かれたものである。例えば管見の限り日本で最初に刊行された飼育書である『鶉書』（一六四九）や、鳥の飼養法を記した『喚子鳥』（一七一〇）は蘇生堂主人によって、近世後期に最も普及していたとされる『百千鳥』（一七九九）は泉花堂三蝶によって記されている。その著者名や書籍の内容から、いずれの著者も鳥屋かその関係者であったと思われる。二九 以上のことから、店で培われた技術や情報を提供する形で刊行されたのが、飼育書や解説書であると言えるだろう。

また、近世は印刷技術が発達した時代でもある。必要な事柄が確にまとめられた鳥の飼育書は、専門的な情報を必要とした鳥屋だけでなく、趣味や娯楽で鳥を飼う人々の手にも渡っていた。馬琴の家記、『吾乃記』には、『百千鳥』を熟読したおかげで鳥を飼う技術がすっかり身についたという記述が認められる。三〇 『百千鳥』は基本的な飼育法や、飼い鳥に起こりがちな病気の処置法が記された鳥の飼育書である。これを参考にし、体に不調のある鳥に処置を行った記述が、馬琴の日記、文政一〇年二月一八日条に認められる。

【馬琴の日記】

昨一七夕方、橋本彦兵衛方、旧冬遣し候カナリヤ少々糞づまりの様子にて、見せニ来ル。牡蠣末、少々遣之。三二

【百千鳥】

糞詰りの事
糞詰りて尻尾を上げて振るもの之。是にハ、カサカサ腐たるを能粉コメコにして、水にほだて吞すべし。是をボレイといふなり。薬種屋ヤクシユヤにもあるなり。それにても通ぜざれば、かた紅ベニをときて用ゆべし。尤モト播餌ホスリエの上へもぬるべし。腹中の熱氣ネツキにてつまるがゆへ也。三三

上記のように、馬琴が行った糞詰まりに対する処置は、『百千鳥』に載っている糞詰まりの対処法と一致するため、馬琴は『百千鳥』に従い処置を行ったと言えるだろう。鳥を飼う上で必要となる情報を、知りたい時にいつでも手に入れることができた飼育書は重宝されたに違いない。

以上のように、鳥屋や鳥の飼育書により飼い鳥に関心のある人々が手軽に情報を得られる環境ができたことが、近世の飼い鳥文化の隆盛に繋がったと考えられる。

では、近世の人々は飼い鳥のどのようなところに楽しみを見出していたのだろうか。この時代に最も人気があった

のは、小鳥の囀りや羽色の美しさを競う「小鳥合」である。前項で述べたように、小鳥合は平安時代に貴族の娯楽の一つとして始まった。それが近世になり、飼鳥文化が武士や庶民層に広がることで、飼育者の数が増え、小鳥合の頻度や規模が大きくなっていったと考えられる。^{三三}そのことがわかる例として、ウズラの声や見目の美しさを競う「鶉合」がある。

喜多村筠庭による江戸時代の百科事典の「喜遊笑覧」(天保元年(一八三〇)自序)によると、「慶長より寛永の頃、鶉合大に行はれし事、其頃の草子に往々見えたり^{三四}」と記述されている。一六世紀末から一七世紀前半頃に鶉合が流行し、それに伴い当時の書物に鶉合の様子が描かれるようになった。近世前期の俳人である松江重頼による『犬子集』(一六三三)には、「籠持ちつれて帰るさの袖、暮るより鶉合やみてぬらん^{三五}」とある。鶉合後の帰り道を詠んだ歌である。同じく近世前期から中期にかけての俳人、岩翁による『若葉合』には、「やくそくも二所なり月二夜、うずら合は途ほと^{三六}の声」と記されている。

このような鶉合の人氣に伴い一六四九年に刊行されたのが、前述した『鶉書』である。『鶉書』の刊行からおよそ百年後、近世後期になると、鶉合は大名や旗本など、特に上流階級の間で流行するようになる。

近年明和・安永の頃、鶉合流行て、大諸侯競ひて飼はれける。鳥籠は金銀を鏤め、唐木・象牙・彫物・螺鈿・高蒔絵にて、皆一・双二・双つゝ、に作り、装束は足掛、天幕を金爛、猩々緋に繡もの手をくし、用ひざる物なし。^{三七}

「嬉遊笑覧」によると、ウズラは大名たちにより、金銀をちりばめた豪華絢爛な鳥籠で飼われていたようだ。また、上記の引用文に続いて、「其会日には江戸中の鳥好の者は、是も件の如く劣らじと美を尽くし、風流を巧み、よき鳥を選び持出て、おなじく飾り立、勝負を争う^{三八}」とある。これらのことから、上流階級に限らず、下級の武士や町人なども鶉合に参加していたと考えられる。同書には当時の鶉合の様子も詳細に記されている。

鶉は朝をむねと啼ものなれば、必朝とく會あり。飼鳥屋は江戸中の者みな集まり、良し悪しを聞きわけ、甲乙を定め、角力番付の如く東西分ち、一、二を以て記すに、大奉書を横に継て書付、東西の壁に貼、もし江戸一となれば、鳥屋共に祝儀として目録を遣す。此費許多也。^{三九}

江戸中の鳥屋が集まり協議し、東西に分かれ、角力番付のようにしてその結果が発表されたという。こうしたことから、鶺鴒は身分の壁を越えて江戸中の鳥好きが集まる一大イベントであったと言えるだろう。

このほかにも、鳥を雛の頃から飼いならし、手乗りにしたり、芸を覚えさせたり、珍しい種類や飼育の難しい鳥を収集するなど、近世における飼いの楽しみ方は様々であった。以上のように、鳥と人の関係が密なものになった時代である近世では、自然と飼育書の重要性も高まったと考えられる。次章では、近世において特に人気が高かったウズラの飼育書について紐解いていく。

二 近世日本におけるウズラの飼育書

二(一) 『鶺鴒目利問答書』『鶺鴒書』『喚子鳥』の書誌

『鶺鴒目利問答書』は全一冊の写本であり、書写奥書には宝暦十一年(一七六一)秋に転写したことが記される。著者は蘇生堂主人と指摘される。

本書はウズラの見極め方やウズラの声についての解説、病気やけがの処置法などについて記されている問答書である。総計三十九の問答から成り、問答38まではウズラの見極め方や鳴き声の優劣について、問答39には病気やけがの

処置法について、五十の項目に分けられ解説されている。

続いて、『鶺鴒書』は一冊に成る大本の木版本であり、刊記によると、慶安二年(一六四九)三月に開版された。著者についての記述は底本には見られないが、蘇生堂主人と指摘される。では、本書の序文を以下見てみよう。

いつしか年たちかへるはしめより、うつら〜とすきゆきしほどに、花もやう〜さかりなるよしなれハ、我もまたとりのすをたちいて、したがへる童にさ、へをもたせてとうゑい山にとこ、ろさしゆく。まつ東照権現おかみたてまつり一れいして、こ、やかしこにめをくはり侍るに、花のもとにハまくひきまハし、色〜のしきものまことに樽のまへにゑいをす、むるハ、是春の風なとうたひなくさむありさま、老たるもわかきもこ、ろをのふるなかつちならん。まことにあめがしたをだやかに、民もゆたかにさかへつ、まは千とせのみとりをなし、木々のこすゑもたいらかに、花も色香をまし鳥のこゑもおのかさま〜、のとやかにさゑづり、けにおさまれる御代のさらなるも、ひとへに此御神の御いくハウのありかたや。ゆくすゑちよのためしそと。さてにわうもんへたちいてあたりを見れハ、こ、に耳順あまりの老人のたちやすらひておハ

せしほどに、よきとも人まうけしとおもひ、我もたちよりやすミける。もたせたるさ、へをとりいたし、かのらう人へもす、めつ、さてよもやまの物かたりし侍るに、よろつのことをとひきくにおもしろく理をつけこたへたまふハ、仏神の御ひきあはせとおもひ侍るなり。四〇。

主人公の我が上野の東叡山寛永寺へ花見に向かうと、一人の老人と出会う。その老人と話をしていると大變博識であることがわかり、その後ウズラについても尋ね、問答が始まるという筋書きである。

本書も問答書であり、その内容は「鶉目利問答書」とほぼ同じで、主にウズラの見極め方や鳴き声の解説、傷病の処置法などである。総計四十五の問答からなり、最後の問答は傷病に関する内容で、二十七の項目に分かれている。最後におまけとして、ウズラの見極め方の口伝や「うずら笛」について語られているが、「鶉目利問答書」にこれらの記述はない。また、先述の通り『鶉書』は管見の限り最初に刊行された鳥の飼育書である。

最後に、『喚子鳥』である。本書は上下二巻二冊からなる半紙本の書物であり、刊記には宝永七（一七一〇）歳次庚寅八月一五日とある。序文の末に蘇生堂主人題とあるこ

とから、作者は蘇生堂主人であると思われる。版元は須原屋茂兵衛、塩屋喜助である。本書の目次は次の通りである。

諸鳥餌飼こしらへ用の事

小鳥煩ふに妙薬の事

飼用により毛色かハる事

小禽多がひ加減の事

諸鳥の形ち毛色名を躰しかへ名追知る事

付り 絵師の指南 彩色の手本に成る事

子飼新鳥のかひようの事

囀りの善悪音色直し用の事

とまり木のかげん其鳥の心得の事

四季の心持替り品々有事

鳥の出所上品下品の事

強き鳥よわき鳥の事

粒餌小鳥の事

小鳥藝の付用色

有事 四一

上記の通り、本書は主に鳥の飼育について様々な情報を扱った書物であり、上巻の前半は、全ての鳥に共通するえさの作り方や、病気やけがの処置法について解説されており、その後、各鳥ごとに目録にある内容が記されている。

上巻には五十三種、下巻には六十七種、総計百二十種の鳥について解説されている。これまでに紹介した、「鶉目利問答書」や「鶉書」のような一つの鳥に特化した飼育書や、同時代の百科事典的な書物^{四二}の中に鳥の部が存在するようないことはあったが、鳥全般を専門とした飼育書としては『喚子鳥』が嚆矢である。^{四三}

二(一)「鶉目利問答書」と『鶉書』の比較

二(一)ア 問答の比較

前節で述べたように、写本である「鶉目利問答書」と刊本である『鶉書』は、構成や問答の内容など、多くに共通点が見られる。これについて松尾真一氏は、「鶉目利問答書」のうずらの鳴き声と病氣手当の方法の内容は『鶉書』と同じ文章の部分が多くあり、成立年代からみて『鶉書』の下書きではないかと思われる^{四四}と述べている。しかし、ここでは具体的な内容の共通点を挙げることはなく、また「鶉目利問答書」の底本には成立年が確認できず、典拠も明らかとなっていないため憶測の域を出ていない。そこで両書の問答をひとつひとつ比較し、共通点や相違点を見ることで、両書の関係性とそれぞれが持つ性格を改めて明らかにしていきたい。

まず共通する点として、両書とも問答書であるというこ

とが挙げられる。両書が問答の形式をとっている理由としては、飼いの鳥の初心者に向けた入門書として記されたためであろう。伊藤仁斎の『童子問』(一七〇七)や中江藤樹の『翁問答』(一六四一)などを見るとわかるように、問答書は体系的にその事柄についてまとめられているため^{四五}、初歩的なことから順を追って深く学ぶことができる。また、平易な言葉や表現で会話をするように一問一答がなされるため^{四六}、自ら質問し、講師から直接教えを受けているように感じられるという利点もあったと考えられる。問答書は、読者を意識した形式ともいえるだろう。

次に、両書の問答の内容を見ていく。本文の内容に沿って任意の項目題をつけ、概要をまとめた一覧表を作成した。表1の備考欄を見るとわかるように、ウズラの鳴き声に関する内容がほとんどを占めている。この理由は本稿第一(二)で述べたように、慶長から寛永の頃(一五九六—一六四五)に鶉合が流行したためと考えられる。

本表によって、「鶉目利問答書」と『鶉書』の内容はほとんどが共通していることが分かった。では、具体的にどのような相違点があるかを明らかにするために、内容に注目する。表1より、『鶉書』にはあるが「鶉目利問答書」にはない内容が存在することがわかる。そこでより詳しい違いを見るために、以降「鶉目利問答書」は『鶉書』の草

表1 「鶴目利問答書」、『鶴書』の内容一覧

通番	章題	「鶴目利問答書」の該当する問答	『鶴書』の該当する問答	備考
1	ウズラの飼育が始まった時期		1	
2	ウズラの見極め方	1-2	2-3	見極め方
3	上等、中等、下等の声について	3-6	4-7	声
4	強音、細音について	7-9	8-11	声
5	「弱かなる声」について	10	12	声
6	賞翫すべきウズラについて	11	13	見極め方
7	「引鳥」について	12-13	14-15	声
8	「非声」について	14-15	16-17	声
9	良い声色について	16-20	18-22	声
10	悪い声色について	21-23	23-25	声
11	「つける」、「かしらはやき」について		26-27	声
12	「はつす」について	24-25	28-29	声
13	「跡」が短い鳥について	26	30	声
14	「平音」について	27-28	31-32	声
15	ウズラの鳴き方、鳴く時の様子について	29-31	33-36	
16	ウズラの繁殖期について	32	37	
17	ウズラの上、中について		38	声
18	春の鳴き方について	33	39	声
19	野生のウズラの声の聞き分け方	34	40	声
20	ウズラの声色の種類について	35-38	41-44	声
21	ウズラの病気やけがの処置法	39	45	

稿であると仮定し、「鶉目利問答書」には存在しない『鶉書』の設問、つまり『鶉書』を刊行する際に追加された設問について見ていく。そして、その設問がなぜ『鶉書』で追加されたのか、その理由についても探ることとする。

表2から、八つの設問が「鶉書」に追加されており、設問1はウズラが飼育され始めた時期について、その他はウズラの鳴き声に関する内容であることが判明した。先述したように、『鶉書』がウズラを飼育するための入門書であることを考慮すると、設問1はウズラを飼う上で知っておきたい前知識として追加されたのではないだろうか。

では残りの鳴き声に関する設問を見ていくが、まずは『鶉書』の「つける」と「かしらはやき」について記された設問26、27に注目する。これらは問いも答えも「鶉目利問答書」には全く見られない内容である。以下、『鶉書』の該当部分を引用する。

「設問26」問ていはく、つけるとはいかやうの事にて候や。

答ていはく、かしら二ツめはやきをいふなり。

「設問27」問ていはく、かしらはやきとはいかやうの事にて候や。

答てていはく、三ツのひやうしせハしきをいふな

表2 『鶉書』に追加された設問

設問	内容
1	近年鶉のとりわけはやり、上なか下ばんミンにいたるまでもてあそひ、いかなるところまでも鶉の二ツ二ツなきところもなく見え侍るなり。むかしもかゝるためしの侍るか。
9	せけんにはほそねといふはいかやうなるを申候や。
26	つけるとはいかやうの事にて候や。
27	かしらはやきとはいかやうの事にて候や。
28	はづさんとはいかやうなるをきゝ申候や。
34	本音の <small>【そもちか】</small> もみちはいかやうなるを申候や。
37	鶉のさかりといふはいつれを申候や。
38	いつれを上といつれを中と申候や。

り。四七

どちらもうズラの声の調子の早さについて解説されており、せわしく鳴く様子であると記されている。これらは必要な内容であるため、「鶉目利問答書」には記載されなかったと考えることもできるが、「鶉目利問答書」、「鶉書」とともに、その次の設問の答えに「かしら三ツひやうしゆるやかに四八」とあるように、はじめの三声の調子が緩やかな鳴き声について触れている。それと対比させるために、声の調子が早い鳴き声の説明が追加されたと考える方が自然であろう。よって『鶉書』の設問26、27は、「鶉目利問答書」に不足していた内容を補うために追加されたと考えられる。

次に、『鶉書』において本音の時の動作について尋ねる設問34であるが、先に「鶉目利問答書」の問答29に注目したい。

問云、鳴出しに重鳴はあしきや。

答云、鳴出しに二ツ三ツ重ぬる共、其内身に入て鳴を本と知るへし。惣して、鳴てそのま、頭をふりむせるやうにする鳥も有。又あたりを見廻し、或ハ頭をはやくさけるもあり。何れも本鳥にハあらず。本音鳴時

は、立あかりいかにもおもひ入て鳴也。是は常の鳥なり。四九

下線部を見ると、本音の時の動作について記されており、『鶉書』の設問34の回答である「本音ほんねなくときハ、あしがりがりいかにもおもひ入りてなくものなり。是つよねの鳥ちどりなり」と一致する。しかし、『鶉目利問答書』の問答29では、鳴き始めに重ねて鳴く鳥について尋ねており、本音の時の動作まで一緒に答えてしまうと情報量が多く埋もれてしまう。また『鶉書』の設問34の前には、「鶉目利問答書」の問答29と同じく鳴き始めに重ねて鳴く鳥について尋ねる設問が存在する。そのため『鶉書』では、鳴き始めに重ねて鳴く鳥についての設問33と、本音の時の動作についての設問34を分けて作ることで、情報過多になることを防いだと考えられる。

続いて「はづさん」について説明された『鶉書』の設問28の回答を見ると、「かしら三ツひやうしゆるやかに、色にほひすくれたるハ、かならずのちはづすことあり。しさいは、ひやうししつかに色いろにほひふかければ、あとのいきみじかくなるゆへ、はづすなり五〇。」とある。ここで「鶉目利問答書」の問答24を見ると、

問云、希頭とハ如何様の事そや。

答云、頭三ツ拍子ゆるやかに色にほひすくれたるが、後はつす事あり。子細ハ、拍子静に色にほひよけれハ、跡の息短してはつす也。^{五二}

とあり、「希頭」として説明されているが、その答えは『鶉書』の「はづさん」の解説とほぼ同じである。この問答の後には両書とも共通して、拍子はよくてもはずれるとはどのようなものかという内容の問答が続いており、『鶉書』では、この問答とのつながりをわかりやすくするために、設問において「希頭」ではなく「はづさん」という語句に変更したのではないだろうか。

では、『鶉書』において「ほそね」を取り上げている設問9を見る。「鶉目利問答書」の設問項目に「ほそね」は見当たらないが、回答の部分が『鶉書』の設問9の答えと一致するものがあるため、ここに引用する。

問云、世間に強音と云て大ききこゆるハ如何様成を云そや。

答云、拍子能ころはし、にをひありて跡強引され共、声ちいさきゆへに細音といふ。是上声也。^{五三}

ここでの設問は「強音」についてだが、回答では下線部にあるように「細音」の説明がされている。『鶉書』の「ほそね」の説明には、「ひやうしよくころばし、にほひこれあり。あとつよくひくされとも、こゑちいさきゆへ、ほそねといふ。これ上のこゑなり^{五三}」とあり、「鶉目利問答書」の「強音」の回答と内容が一致する。一方、『鶉目利問答書』には、「強音」に対する回答がない。そこで、「鶉目利問答書」で抜けていた「ほそね」についての設問を『鶉書』で付け加えることにより、「鶉目利問答書」で設問と回答に生じたずれを正したと考えられる。

最後に『鶉書』の設問37、38を見ていく。設問37はウズラの繁殖期の時期についての問いであるが、「鶉目利問答書」の設問32にも「問云、五とやまで盛ならん歟^{五四}」とあり、文言は多少異なるが同じく繁殖期の時期についての設問が見られる。しかし、この「鶉目利問答書」の設問32の答えには、「世間には頭様々有といへとも、翁ハその品を一切しらつ。能にほひの色声有は上とす^{五五}」とあり、これは繁殖期の時期を問う設問に対する答えにはなっていない。そこで『鶉書』の設問38のウズラの見極め方に対する回答^{五六}をみると、「鶉目利問答書」の設問32に対する内容であった。つまり、「鶉目利問答書」の設問32に対する本来の回答は存在せず、記されている回答はウズラの見

極め方の答えであったため、それを『鶉書』で設問38（ウズラの見極め方について）を加えることにより「鶉目利問答書」に生じていたずれを正したのだろう。

以上を勘案すると、「鶉目利問答書」に何らかの誤りやずれが生じており、それを正すために『鶉書』で改訂が行われたと考えられる。また設問27、28のように新しい知識の追加も見られるため、「鶉目利問答書」が『鶉書』の草稿であったと見て間違いないだろう。

ところで、『鶉書』の前付けについても触れておきたい。先述した通り、『鶉書』にのみ「我」と「老人」が問答をかわすことになった経緯が前付けに綴られている。この「我」について松尾氏は「著者のことと考えられる^{五七}」と述べている。しかし、前付けがなく登場人物も存在しない「鶉目利問答書」の或る設問に対する回答には、「世間には頭様々有といへとも、翁ハその品を一切しらつ^{五八}」とある。とすると、実はこの「翁」こそが著者ではないだろうか。問答書を書く際の手順として、自分で自分に問いかけながら問答を書き出す方法が想定される。そのため、回答を書く際に、一人称として「翁は」と記したのだろう。とする、「鶉目利問答書」において回答者である「翁」が、『鶉書』において質問者である「我」と入れ替わったとも考えられる。しかし、これまでの調査から「鶉目利問答書」は『鶉書』

の草稿であることが確認できており、著者である蘇生堂主人は「鶉目利問答書」を著した時点で知識も経験も熟していると考えられるため、『鶉書』において己を未熟な「我」に置き換えることはしないだろう。

また、文体の違いにも注目したい。以下、表1の第二項「ウズラの見極め方」にあたる問答の引用である。

表3の下線部に注目すると、「鶉目利問答書」は常体で記されているが、『鶉書』は候文で記されている。これは、『鶉書』には「我」と「老人」が登場し、「我」が「老人」にウズラについて尋ねる形式で問答が進むため、目上の「老人」に対して「我」が敬意を払っていることを表していると考えられる。本節の序盤で述べたが、問答書は質疑応答の形であるため、自ら質問し、講師から直接教えを受けているように感じられる。『鶉書』に文体の違いが見られるのは、講師に敬語で質問する形にすることにより、講師と質問者の関係をより意識付けるためであろう。よって『鶉書』に質問者である「我」と回答者である「老人」が登場するのは、読み手が「我」と同じ目線に立つことで、直接教えを受けているような感覚になり、より読みやすくなるという演出なのではないだろうか。つまり、「我」は著者ではなく読者であり、下書きである「鶉目利問答書」よりも、刊本である『鶉書』の方がより読者を意識して記され

表3 文体の比較

「鶉目利問答書」	『鶉書』
<p>問云、鶉の見鳥顔相、いかやう成をよきと云そや。</p> <p>答云、見鳥の目利様ニ有当時定めなきとへども、頭大きになかくはしねくゝらす雀はしに、首なかむね出て、肩いかりにひろく、とうあいなかく、大小によらす毛の色ハほうよりむねまでかきいろにて、赤蔀なる吉。ふたん籠の内にして静にてとらへみれハ、鳥よわく成。是上鳥なり。かやうの鳥にはふとね多し。</p>	<p>問ていはく、鶉の見鳥<small>うつら</small>ハいかやうなるがよ<small>とふ</small>く候や。</p> <p>答ていはく、見鳥のめきゝさま／＼ありといへとも、あたる事不定<small>ふぢやう</small>なり。さりながら、かしら大きくながくして、はしねくゝらす、すゝめはしくびながく、むねいでゝ、かたいかり、くちひろくどうあいながく、大小によらず。いろハほうよりむねまでかきいろにて、あかふよし。いかにもふだんかごのうちしつかにして、とらへて見れハ、鳥<small>とり</small>やハらかなるが上の鳥なり。かやうのとりにハふとねおほきものなり。</p>

たと考えられる。

二(二)イ 傷病に関する項目の比較

続いてウズラの病氣やけがに関する項目に注目する。「鶉目利問答書」は問答39において四十三項、『鶉書』は問答45において二十六項の傷病の症状と処置法について解説されており、項目数は刊本である『鶉書』より写本である「鶉目利問答書」の方が多いたことが分かる。なぜここまで項目数に差があるのだろうか。それについて検討するために、本文に沿って任意の項目題をつけ、内容の一覧表を作成した。

以上のように、「鶉目利問答書」の問答39および『鶉書』の問答45には病氣やけがの処置法や季節ごとの飼育法、若鳥の鳴かせ方などが記されているが、そのほとんどは傷病の処置法についてである。そして第26項までは両書ともほとんどの項目が共通しているが、第27項以降は「鶉目利問答書」にのみ存在し、『鶉書』には欠けていることが明らかとなった。これまでのように「鶉目利問答書」が『鶉書』の草稿であると仮定した場合、「鶉目利問答書」にのみ見られる第27項以降の項目は、『鶉書』を刊行する際に全て削られたということになる。この真偽を確かめるために、まずは「鶉目利問答書」にのみ見られる第27項以降の内容

表4 病気やけがの内容一覧

通番	内容	「鶉目利 問答書」	『鶉書』	備考
1	胸を痛めた時	○	○	『鶉書』の方が症状の記載が多い。
2	胴を打った時	○	○	
3	身体に痛みがある時	○	○	『鶉書』の方が処置法の記載が多い。
4	脚が弱い時	○	○	『鶉書』の方が処置法の記載が多い。
5	足首をひねった時	○	○	処置法に違いあり。
6	腿をねじった時	○	○	症状に違いがあり、 『鶉書』の方が処置法の記載も多い。
7	身体が自由に動かない時	○	○	
8	脚が折れた時	○	○	
9	痩せすぎの鳥	○	○	『鶉書』の方が症状の記載が多い。
10	糞が詰まった時	○	○	
11	羽の根本を痛めた時	○	○	
12	翼の関節を痛めた時	○	○	
13	羽の先の関節を痛めた時	○	○	
14	太りすぎの鳥	○	○	
15	風ばれの鳥	○	○	
16	下痢になった時	○	○	
17	羽ジラミがついた時	○	○	
18	嘴の付け根にこぶができた時	○	○	
19	眼病になった時	○	○	
20	ネズミにかまれて傷ついた時		○	「鶉目利問答書」にはない項目。
21	足の裏にタコができた時	○	○	
22	夜中に動き回る時	○	○	
23	なかなか鳴き出さない若鳥	○	○	
24	ウズラが鳴かなくなった時	○	○	

25	換羽の時の注意点	○	○	処置法に相違点があり、『鶉書』の方が記載も多い。
26	春、夏、冬の飼養法	○	○	「鶉目利問答書」の方が処置法の記載が多い。
27	ウズラが跳ねて死んでしまった時	○		
28	太った時	○		
29	ウズラが失神した時の処置法	○		
30	ウズラが鳴き出す前に与えるもの	○		
31	水を多く飲み長い糞をする鳥	○		
32	口にできものができ、えさが食べられなくなった時	○		
33	目ヤニが出るとき	○		
34	目が悪い時	○		
35	身体が不自由な鳥	○		
36	擦り傷ができ血が出た時	○		
37	若鳥の鳴かせ方	○		
38	ウズラに与えるべきもの	○		
39	ウズラに与えてはいけないもの	○		
40	病気になった時	○		
41	水をたくさん飲む時	○		
42	万病に効く薬の作り方	○		
43	基本のおさらい	○		
44	羽が抜け替わった時	○		

に注目する。「鶉目利問答書」の第26項以前と第27項以降を比較したところ、内容が一部重複する項目が確認できたため該当部分の本文を引用する。

二重下線部が実際に重複している部分であるが、その全ての内容が症状に当たり、処置法に内容の重複は見られない。また表4より、第7項、第14項、第19項は『鶉書』にも同じ内容が存在する。仮定に沿って、「鶉目利問答書」が『鶉書』の下書きであるとした場合、「鶉目利問答書」で症状が重複する項目は、『鶉書』として改訂される際にひとつにまとめられると考えられる。となると、『鶉書』の第7項、第14項、第19項には、「鶉目利問答書」のみ見られ、かつ症状が一致する項目（第35項、第28項、第34項）に記された処置法が追加されているのではないだろうか。そこで、該当する項目を「鶉目利問答書」の対応する項目と比較したが、重複するのは「鶉目利問答書」と同じく症状に当たる部分のみであった。^{五九}よって「鶉目利問答書」にのみ見られる処置法が『鶉書』に追加された事実はないことが分かった。となると、「鶉目利問答書」の第27項以降は、『鶉書』に反映されることなく削除されてしまったということになる。

以上のことを鑑みると、これまでの仮定とは反対に『鶉書』で不足していた項目が「鶉目利問答書」で追加された

表5 「鶉目利問答書」で内容が重複する項目

第26項以前の項目		第27項以降の項目	
7	中風気の鳥ハ、箆まわりの時足を重こはんにもたれかゝるもの也。桑の根を煎し、常に水器に入へし。	35	中風の鶉にハ百会に灸して吉。
14	油掛りたる鳥ハ、首根ふとく見ゆるものなり。是にハ赤土をしいて置なり。又もぐさにてその油の懸りたる所少つゝ灸するもよし。	28	鶉に油かゝりたるハ、その所をそろ／＼と指にてもめぼうする物也。
19	目のはたに出る事有ハ、五冷香{馬嶋五靈膏乎}細々指てよし。	34	目のわた出るには、上に紙をぬらし置、かねを焼少つゝあて湯に入れば能なり、もゝのいたみも時々右のことくすれハ吉。口の内はに草出来たるにも同前。
31	水多ク呑鳥、つゝこへふんなかくする鶉有。是には蛤の壳焼て粉にし箆へ入て吉。又軽石ひへふとにして籠へ入もよし。	41	大水を呑鳥には、油少ツゝ一日に二三日用へし。二三日の内に当る也。

という可能性が浮上する。しかし、両書に共通する第26項以前の項目を比較すると、そうとも言い難いことが確認できた。表4の備考にあるように、「鶉目利問答書」と『鶉書』には内容が僅かに異なる項目が存在する。そこで、内容の異なる項目の本文を比較するために表を作成した。波線は一方の書にのみ記載されている情報、太線は内容はほぼ同じだが、使用される語句が異なる部分を示す。

表6より、九つの項目に内容の違いが確認できた。波線部を見ると、そのほとんどが「鶉目利問答書」にはなく、『鶉書』にのみ見られる情報であることが確認できる。例外として、第26項にのみ互いに存在しない情報が記載されており、「鶉目利問答書」には砂を月に一度代えること、『鶉書』にはとりわけ与えるべき虫について記されている。その他は『鶉書』の第1項、第6項、第9項においてより詳しい症状の説明が追加されており、第3項、第4項では葉を水けと呼ばれる水入れに入れて与えることなどが新たに追加されている。全体を通して見ると、片方の書と比べて情報が多く記された項目は、「鶉目利問答書」に一項、『鶉書』に七項見られる。よって「鶉目利問答書」と比べて『鶉書』はより丁寧な解説がされていると言えるだろう。

第5項、第6項、第25項には、「鶉目利問答書」と『鶉書』とで、内容は同じだが語句は異なる部分がある。まず

は第25項であるが、「鶉目利問答書」には「月の輪極れハ」とあるが、『鶉書』には「目のわきはり出候ハ、」と記されている。鳥には困眼輪と呼ばれる目の周りを困う輪っかが存在する。おそらく、ここでの「月の輪」と「目のわき」はそれを指しているのだろう。「月の輪」については、単純に「目の輪」の誤字である可能性もあるが、「月の輪」という用語が存在する可能性もある。しかし、管見の限り困眼輪を「月の輪」と表現する記述は「鶉目利問答書」以外には見られず、その真偽は明らかでない。仮に「月の輪」という語があったとしても、『鶉書』が刊本であり大衆に読まれる機会が多いことを考慮すると、わかりやすい表現である「目のわき」が採用されたと考えられるのではないだろうか。

続いて第5項であるが、「鶉目利問答書」で「たきにうたせてよし」と記されている箇所が、『鶉書』では「夜気やきにうたせてよし」と記されている。ここで『鶉書』の第6項の処置法を見ると、「はさみむしをかひ、夜気やきにうたせて、人とをきところをきてよし」という記述があり、これは『鶉書』の第5項の処置法と同様であると記されている。一方「鶉目利問答書」の第6項を見ると、処置法には「はさみ虫飼てよし」とのみ記されている。よって『鶉書』の第5項の「夜気」が誤りで「鶉目利問答書」で「たき」に

表 6 内容の異なる項目の本文比較

通番	「鞠目利問答書」	『鶴書』
1	胸をつきたる鳥ハ、ふける時むねを出し、頭をそらし鳴もの也。 是にハ三七根を割、水器に入、時々はたか虫かふへし。	むねをつきたる鳥ハ、ふけるときむねをいたし、かしらをそらして <u>とうへつ</u> けなくものなり。 このくすりにハ、三七のねをきさミ、 水けへ入もちゆへし。とき／＼はだかむし（＝羽や毛のない虫）をかふなり。
3	頭をあけず、こはんきわにて鳴鳥ハ、身に痛あり。 甘草、せきしやう割、等分用へし。	かしらあけず、かうはんきハにてなく鳥ハ、身にいたミあり。 このくすりにハ、かんさう、せきしやうきさミ、等分にして <u>水けへ入用</u> 。はだかむし <u>毎日</u> かふなり。
4	足弱鳥ハ、籠廻りの時、籠に肩さきを付てまわるもの也。老鳥も是に同し。 人參割用へし。	あしよハき鳥ハ、かこまハりのとき、かこにかたさきをつけてまわるものなり。老鳥も同ぜん。 このくすりにハ、にんじんをきさミ、 <u>すこしつゝ水けへ入用</u> なり。
5	ひちをねじたる鳥ハ、其方の足をふみ出し鳴もの也。 はさみ虫を飼、人遠き所に常に置なり。 <u>たき</u> にうたせてよし。	ひちをねぢたる鳥ハ、そのかたのあしをふみ出しなくものなり。 このくすりにハ、はさみむし（＝腹端にかぎ状のはさみを持つ虫）をかひ、人とをきところにつねにをき、おり／＼ <u>夜氣</u> にうたせてよし。
6	もゝをねしたる鳥ハ、鳴跡へまわる時、ひちを <u>ねち</u> 、その方の足をひきつるもの也。 はさみ虫飼てよし。	もゝをねぢたる鳥ハ、ふけるにあとへずさるとき、ひちを <u>のべ</u> 、そのかたのあしをひきつるものなり。 このくすりにハ、 <u>右</u> 同ぜん。はさみむしをかひ、 <u>夜氣</u> にうたせて、 <u>人とをきところにきて</u> よし。
9	肉ひけたる鳥ハ、第一毛いろあしくみゆるなり。 槲栗を粉にしてすり飼へし。	しゝのひけたる鳥は、 <u>第一</u> いろあしく見え、 <u>鳥むつげばきたなくなるもの</u> なり。 このくすりにハ、かちくりをすりゑにしてかふへし。

20		<p>ねずミにもしくはれ候て、いたミ候ハ、とりもちをあつきほとに丸じて、ころもにすりゑのこにても、又ハこぬかにてもころもにかけて、<u>鶺鴒の口</u>をあけ、右のくすり入候て、水すこし入候へハのミ申候。たちまちいたミもやミ、はれもひく。十日ばかりのうちにけもはへ申候。</p>
25	<p>とやの時、餌にハあわひへ等分に合用、第一ハすり餌用て吉。粉にハあわを粉にして、せりにても合するなり。とやの内砂替へからす。但、籠の内薫ひ悪くハ替ても吉。<u>月の輪極れハ</u>、其鳥とや仕舞と心得へし。とや前につめはしをつくる物也。</p>	<p>とやのときのゑにハ、あわひゑを等分に合せ用候て、<u>第一</u>すりゑ用てよし。すりゑのこにハ、あわを粉にして、せりにてもなにてもあをミに合なり。とやのうち、すなをかへましく候。たゞし、かこのうちあしきにほひ出候ハかへてもよし。<u>目のわきはり出候ハ</u>、そのとりハとやしまひ候とするべし。とやまへにつめはしつくる事ならひ口伝あり。</p>
26	<p>春夏の飼様、砂十日に一度つゝ替へし。砂水ハ土を一ヶ月に四五度程あびせ、二ヶ月に一度ツゝ鶺鴒を小雨にうたせ、餌ハ粟、ひへ等分にして飼へし。春ハはさみ虫一日に一ニツ程飼、せりはこべ折々用へし。夏ハいなご一日に一ニツ用、せり、<u>地しぼり</u>、杓杞の葉時々可用。冬の内ハ、油ゑ、あわ、ひゑ等分にして飼へし。はさみ虫、はだか虫細々飼て吉。<u>一ヶ月に一度ツゝ砂替べし</u>。</p>	<p><u>春夏</u>のかひやうハ、すな十日に一度つゝかへべし。すな水には、くろ土を一ヶ月に四五度ほどあびせ、二ヶ月に一度つゝ鶺鴒を小雨にうたせて、ゑにハあわ、ひゑを等分にしてかふへし。春ハはさみむし一日に二ツほどかひ、せり、はこべ、おり／＼用。<u>夏</u>ハいなご一日に一ツ二ツ、せり、くこのはとき／＼よし。冬ハあふらゑ、あわ、ひゑ等分にしてかふべし。はさみむし、はだかむしさい／＼かふへし。<u>とりわけ、いなご、はさみむしハあるかなかにもくすりなり。とやにかゝりてよ</u>り、これにしくハなし。</p>

直されたと考えるよりも、「鶉目利問答書」で誤って書かれた「たき」が『鶉書』で「夜気」に改められ、かつ『鶉書』の第6項にもその情報が追加されたと考える方が自然であろう。

続いて第6項であるが、「鶉目利問答書」では「ひちをねち」と記された箇所が『鶉書』では「ひちをのべ」となっている。これについて適切に真偽を確かめることは致しかねる。しかし第5項の考察で述べたように、『鶉書』の第6項は「鶉目利問答書」で使用されている語句を「夜気」に直し、かつ新たに情報も追加されたものであるとすると、『鶉書』の「ひちをのべ」の方が正しいと考えることもできるのではないだろうか。

ここでもう一度、「鶉目利問答書」にのみ見られる第27項以降に注目したい。先にこれまでの仮定とは反対に、『鶉書』で不足していた項目が「鶉目利問答書」に追加されたという可能性について言及した。そこで、「鶉目利問答書」の第27項以降と第26項以前を比較すると、症状が重複する項目は見られたが、処置法に内容の重複は見られなかった。一方で『鶉書』は第26項までしか記載がないが、項目の内容に重複は見られず、「鶉目利問答書」と比べてより詳しい解説が追加されている。よって「鶉目利問答書」では、先に重要性もしくは信憑性の高い情報について書き出し、

後半はそれ以外の重要性が低かったり、他と比べて古かったりする情報を書き出したのではないだろうか。

また、『鶉書』は刊本である。出版元や読者が存在する刊本では、需要に応え、ある程度の売り上げをあげることが求められたはずである。そのため正確でない情報や必要以上に知識を羅列することは好まれず、頁数の関係上内容を削らざるを得ないこともあっただろう。また、全体を通して唯一「鶉目利問答書」になく『鶉書』にのみ見られる項目である第20項は、「鶉目利問答書」では必要ないと思われていた、もしくは書きそびれていた情報が『鶉書』の発行にあたり必要とされ追加されたのではないだろうか。したがって、下書きとしてひとまず考え得る限りを書き出された「鶉目利問答書」が、刊本にされる際に内容を整理され、重要な事柄に関しては加筆されることにより、『鶉書』の形になったのだろう。以上のことを鑑みると、『鶉書』は「鶉目利問答書」に加筆修正を加えた改訂版であると考えられる。

二(三) 近世初期と中期以降におけるウズラの飼育書の 違い

一七二〇年に蘇生堂主人によって刊行されたと指摘され

る『喚子鳥』は、これまで見てきた『鶉書』のようにウズ

ラにのみ特化した飼育書ではなく、様々な種類の鳥についてその特徴や飼育法、芸の仕込み方などが記されており、その解説は多岐に渡る。そこで『喚子鳥』ではどのようなウズラが描かれ、『鶉書』と比べてどのような違いがあるのか見ていきたいが、その前にある疑問が生じる。この『喚子鳥』は、一六四九年に刊行された『鶉書』と同じ蘇生堂主人によって記されているが、なぜ著者が同じであるにもかかわらず、二冊が刊行されるまでに六十年以上の隔たりがあるのだろうか。同じく蘇生堂主人により一六四五年に成立されたとされる「鶉目利問答書」に至っては、六十五年もの隔たりとなる。これについて細川博昭氏は、当時の平均寿命などから考えて『鶉書』と『喚子鳥』は同一人物によるものとは考え難いこと、また、内容の充実度や文章から『鶉書』が書かれた時点の著者の年齢が二十代前半とは思えないことから以下のように推測している。

⑦ 貞享四年（一六八七）から宝永六年（一七〇九）にかけての「生類憐みの令」のため、本は書きあがっていたものの、出版することができなかった。

⑧ 蘇生堂というのは屋号かそれに類するもので、代が替わっても出版物に記載する名前は同じ蘇生堂主

人を用いた。六〇

『喚子鳥』が刊行されたのは、「生類憐みの令」が取り下げられた年の翌年、宝永七年である。ここで生類憐みの政策として実際に出された町触を調べると、慰み者として生き物を売買したり飼育したりすることを禁じる御触が確認できた。六二 このような状況下では飼育書の需要は望めず、出版を自粛したと考えるのが自然であろう。しかし、『鶉書』の著者の後継者が『喚子鳥』を記した可能性も捨てきれない。よって、既に出来上がっていた『喚子鳥』が、「生類憐みの令」が取り下げられた後に蘇生堂主人の後継者によって出版されたと考えられる。

では本題に入っていこう。本書の目次は本稿二（一）にある通りだが、その内容は飼育情報の部と、各種類の鳥の解説の部の大きく二部に分けられる。飼育情報の部には一般的な鳥の飼い方が記されており、目録にある①「諸鳥（しよとり）餌飼（ゑがひ）こしらへ用の事」と②「小鳥（ことり）煩（わづら）ふに妙薬（めうやく）の事」がそれに該当する。

①では、九種類の餌の材料や作り方について解説されている。『鶉書』では、餌に関する情報は問答45の第26項にのみ見られ、季節ごとに与えるべき餌が記されている。まずは『鶉書』にみられる餌の特徴をまとめた。

表7 『鶉書』に見られる餌の特徴

春の餌	粟、稗を同量与え、鈇虫1, 2匹と芹、繁縷 <small>はこべ</small> を時々与える。
夏の餌	粟、稗を同量与え、鈇虫1, 2匹と芹、枸杞の葉を時々与える。
冬の餌	粟、稗、荏胡麻を同量与え、鈇虫、裸虫を少しずつ与える。

表7によると、基本は粟、稗を同じ分量与え、春と夏はそこに虫と青菜を加えるように記されている。冬は粟と稗に荏胡麻も加えてそれぞれ同じ分量を与え、虫も与えると良いそうだ。また、蝗いなごと鈇虫は何よりも良い薬になり、特に換羽期の際に与えると良いことも記されている。続いて、『喚子鳥』に見られる餌の特徴についてまとめた。

先述した通り、『喚子鳥』では九つの餌の材料や作り方、その特徴などについて記されている。表8にある餌は各鳥の解説の部にも記されており、鳥ごとに与えるべき餌が分かるようになっていた。では、ウズラには何を与えるように記されているのだろうか。『喚子鳥』のウズラの解説を見ると、「餌えがひ ぎび 粟あま ひゑ 米こめ」となっており、表8のつみ餌にあたると思われる。『鶉書』に記されている餌と大変わらないことが分かった。違いとしては、『鶉書』では虫を与えることを推奨しているのに対し、

『喚子鳥』では餌として虫を与えることは記されていない。その代わり、②「小鳥こどり煩わづらふに妙薬めうやくの事」の中に虫を薬として与えるという記述を発見した。

木綿わたのむしむし、又またばうふりむしむし、又またほそきミ、ずゑにまぜ、又ハゑのうへにをき、よハき鳥にかふべし。第一鶯うぐひすもちひに用てきめうなり。右のむしなきときハ、ゑひずるのむしむし、いよくよし。何れもなきときはたまごをかふべし。ゑひずるといふハ、くたぎのむしのごとくかづらのくきの中に有虫なり。三家がより売につる。六六

綿虫、棒振虫、蚯蚓みみずを餌に混ぜて与え、これらの虫がない場合は葡萄蔓虫えびづるむしを与えるのが良いと記されている。一方『鶉書』では、餌として鈇虫や裸虫、蝗いなごを与えることを紹介しているが、薬としても良いということも記されている。また、『鶉書』において餌についての記述がある第26項は、ウズラの傷病の処置法について記された問答45の中の1項目である。その中で餌に関する解説がされているということは、餌も治療の一環として捉えられていたのではないだろうか。反対に『喚子鳥』では、目録からわかるように、餌に関するのと傷病の処置法とは分けて記され

表8 『喚子鳥』に見られる餌の特徴

名称	材料	特徴
すり餌	はいごこ（＝川魚の名称か）、米、ぬか、青葉の汁	鳥により生餌とはったい（＝黒米とぬかを炒った上で挽いたもの）の分量などに違いがある。材料を入れる順番など、詳細な作り方の記述あり。材料の配分によって、餌の名称が異なることも説明されている。
生餌	はいごこ、小鮒、その他川魚	すり餌の一種。どんな川魚が入っていても良いが、はいごこが最も良い。
はったい	黒米一升、ぬか一升	どんな鳥にも左の分量で作ると良い。
青み	芹、大根の葉、菜の花、筍木	
胡桃	胡桃	
合わせ粉	生餌、はったい、青みの汁	鳥ごとに材料の配分が記されている。すり餌を作るのが難しい時や、小鳥をあまり飼っていない人に適した餌。
つみ餌	稗、粟、きび、米、荳胡麻、胡桃	左の穀物を食べる鳥をつみ餌という。この鳥には何よりも水を与える。左の穀物の他に木の実などを好む鳥もいるが、それらを与えてよいか判断することは難しいため、左の餌を与えると良い。
白餌	すり餌に青みを入れていないもの、生餌、胡桃	
さし餌		自分で餌を食べられない雛鳥のために、小さいへらに餌をのせて与えることをいう。

ている。以上のことから、近世中期には治療することと飼
い養うことの区別が行われるようになったのではないだろ
うか。

続いて②「小鳥煩ふに妙薬の事」に注目する。傷病に関
しては『鶉書』に多くの情報が記載されている。そこで、『喚
子鳥』にはどのような内容が記されているか確認し、『鶉書』
と比較するために②の内容に任意の項目題をつけた表9を
作成した。

第1項から第七項までは病気やけがの処置法、第8項か
ら第11項は鳥を飼う上で知っておくべき飼育情報が記され
ている。第8項以降の飼育情報は『鶉書』には全く見られ
ないが、第7項までの傷病の処置法に関する情報は『鶉書』
にも存在する。そこで、『喚子鳥』と『鶉書』の傷病に関
する本文を比較したところ、症状と処置法が共に一致する
箇所があるものは、第6項の虫が湧いた時についてのみで
あった。

【喚子鳥】

虫むしわき申時ハ、尾かたの方よりさかぶきにたばこのけふり
ぶきかけてよし。六七

表9 「小鳥煩ふに妙薬の事」の内容一覧

通番	内容
1	鳥が餌を食べない時
2	餌を食べるが弱る鳥の処置法
3	弱っている鳥に食べさせるべき虫について
4	脚を患った時
5	脚、口、腰など何にでも効く薬について
6	虫が湧いた時
7	糞が詰まった時
8	籠の掃除の仕方
9	水浴びの方法と水浴びができない鳥について
10	鳥を多く買う人の餌の仕入れ方
11	雀に紅粉を多く与えると毛色が赤くなるらしい

【鶉書】

羽むしつきたる鳥ハ、ふくれてけしろあしく、まもなく身をせゝるものなり。このくすりにハ、かちくりこにしてひねりかくるもよし。また、鶉をかミのふくろに入、かしらをいたし、たばこのいきふさかくるなり。又、くろ土にいわうをこまかにして、すこし合せあびせてもよし。六八

虫が湧いた時には、ウズラにたばこの煙を吹きかけると良いという記述が両書に確認できる。しかし、『鶉書』には虫が湧いた際にウズラが訴える症状や、たばこの煙を吹きかけること以外の処置法についても記されており、『鶉書』の方がより詳細に解説されている。

また、『喚子鳥』の第4項と第7項は症状のみ『鶉書』と類似する項目が確認できた。では、これらの処置法はどのようなものであるだろうか。まずは『喚子鳥』の第四項、ウズラが足を患った時から見ていく。

諸鳥足をわづらふ時ハ、大鷹のふんを付るなり。又足はれたミ、あるひハとしぬけ大きにわづらふ時ハ、たかのつめ草といふ草のはをすりはちにてすり付てよし。此草諸鳥のしよびやうによし。口に入れて口けに

よし。又おときりさうといふ草、しよ鳥のくすりなり。またえもぎ草も足をわづらふにふませてよし。しかれどもたかの爪草にハをとりたり。六九

脚を患った時は、大鷹の糞をつけたり弟切草を与えたり蓬を踏ませるなどの処置法があるが、何よりも鷹爪をすりつぶしたものを与えるのがよいと記されている。一方『鶉書』では、ウズラが足を負傷した際の症状を複数に分けて紹介しており、その症状は脚が弱っている時、足首をひねった時、腿をねじった時、骨折した時の四つである。『喚子鳥』では、脚の負傷については一つの症状しか記されていないことから、『鶉書』と比べて整理されていると言えるだろう。では、『鶉書』の四つの症状に対する処置法について見ていくが、足首をひねった時と腿をねじった時は同じだが、その他は異なっている。足が弱っている時は「にんじんをさぎミ、すこしつゝ、水けへ入用なり七〇」。足首や腿をねじった時は「はさミむしをかひ、人とをきところにつねにをき、おり／＼夜氣にうたせてよし七」^七、骨折した時は「まも、のかわ粉にして、かうやののりにませつけて、柳をそへ木にゆひ、すなハちやなきのかわにてまきをくへし七二」^{七二}と記されており、使用する薬も行う処置も『喚子鳥』とは全く異なる。続いて『喚子鳥』の第7項、糞が詰まった時の処

置法はこのようになってゐる。

諸鳥しよとふんのけつしてつまるにハ、紅粉べんをとき糸にまぜくハせてよし。つミ糸鳥にハ水にまぜてよし。又はづを水につけ、その水をのましむ。しかし過る時すくハけが有。上鳥にハ無用。七三

紅粉を溶き餌にまぜて与えることを基本とし、「つみえ」と呼ばれる粟、稗、米、荳胡麻、胡桃などを主食とする鳥には、紅粉を水に溶いたものや巴豆をつけた水を与えるように記されている。またそれらを与えすぎるとよくないことや、上鳥には与える必要はない旨も記されている。一方『鶉書』の処置法は、

うちのつまりたる鳥ハ尾をさすものなり。このくすり
にハ、いのかづちきさみ、水けへ入かふへし。またく
ハつせきを粉こにして、口へ入水みづをすくひ入もよし。たゞ
しすなにてつまりたるも、右同どうせんに尾をさし鳥ふく
れ口くちをあくものなり。これはつむのほにてほり出すな
り。七四

となつてゐる。猪小槌を刻んだものや滑石の粉を与えるよ

うに記されており、これも『喚子鳥』の処置法とは異なつてゐる。また砂が詰まった際の対処法も記されているが、これも同じく『喚子鳥』には見られない情報である。

『喚子鳥』と『鶉書』で症状が類似する第4項と第7項について比較したが、それぞれの処置法は全く異なつてゐた。理由としては、『鶉書』は『喚子鳥』よりも六十年以上昔の書物であるため、『喚子鳥』が刊行される頃には『鶉書』の情報は古くなつてしまひ、新しく確立した処置法が『喚子鳥』に記されたということが考えられる。また、『鶉書』では二十六項もあつた傷病に関する項目が、『喚子鳥』には七項しか見られないことや、『鶉書』では四つに分かれていた足の負傷に関する項目が、『喚子鳥』では一つの項目にまとめられていたこと、そして『喚子鳥』の第6項と内容が一致する『鶉書』の項目には、『喚子鳥』よりも多くの情報が記載されていることが明らかとなつた。どれも『鶉書』の方が記載されている情報量が多く、『喚子鳥』の方は簡潔にまとめられている。これに関しては、作り手の狙いや読者からの需要が変化したということが考えられる。例えば、餌の作り方や表7の第8項から第11項など、『喚子鳥』の飼育情報の部に載っている内容のほとんどは『鶉書』には記載されていなかった。反対に『鶉書』で大部分を占めていたウズラの鳴き声に関する情報は、『喚子鳥』

ではさして重視されていない。近世中期以降は鳴き合わせに関する情報より、鳥に合った餌の作り方や住処の整え方、鳥の習性を知ることなどに需要があつたと考えられる。ここで『喚子鳥』のウズラの解説を見てみよう。

鶉うづら 餌飼えがひ きび 粟あは ひゑ 米

大きき毛色世けいろよに知る鳥なれば、しるすにおよばず。こゑ大きに善悪ぜんあくあり。よき鳥まれに有あ時ハ大きに調てうほう法す。あら鳥冬ふゆおほくいつる。此かご上ハあミをはり、下にハ砂すなを入かふべし。うなきの生なまゑにて夜よがひなどする時ハ、冬ふゆもふける物なり。お鳥にハすりゑを用もちゆ。七五

まずはウズラに与えるべき餌について記されている。続いてウズラの見た目の特徴が記されているが、人口に膾炙した鳥であるということと詳しい説明は省かれている。当時、ウズラが非常に身近な存在であつたことが窺える記述である。その後、ウズラの鳴き声に関する解説がされるが、鳴き声には善悪があり良い声の個体は非常に大切にされるということのみ記されている。『鶉書』のように声色の説明やそれぞれの声の優劣については解説されていない。その代わり『喚子鳥』では、ウズラは冬になると飛び上がる習性があることを説明し、その対処法として籠の上に網を

張り下には砂を敷くことや、鰻の生餌で夜飼いすれば冬も轉ること、小鳥にはすり餌を与えることなどを進言している。

では、ここで『鶉書』と『喚子鳥』の特徴をまとめよう。『鶉書』は、近世初期の鶉合の流行に伴い刊行された飼育書である。そのため、ウズラの鳴き声の特徴や優劣などについて非常に詳細に解説されており、ウズラを飼育する意義の大部分が、優秀な鳴き声のウズラを選出し鶉合を行うことであつたことが窺える。本書の後半には、ウズラが病気がけがをした際の処置法について、細かく分類された症状ごとに解説されている。換羽期のことや飼育する上で季節ごとに注意すべきことなど、飼育法についても多少触れられているが、その分量は鳴き声や傷病の処置法と比べると非常に少ない。以上のことから考えると、近世初期のウズラの飼育は、捕らえたウズラの優劣を見極め、その鳥を良い状態に保つために、何かあつた際には治療するということに重点が置かれていたと考えられる。

一方『喚子鳥』は、様々な鳥についてその特徴や飼育法などが解説された飼育書である。本書は最初に主要な餌の種類と作り方、そして傷病の治療法が記されており、その後、各鳥ごとにその特徴や与えるべき餌、適切な住処の作り方などが簡潔に記されている。ウズラの説明では、主に

その特徴や飼育法、習性などが記されていたが、『鶉書』のように鳴き声に関する詳細な解説は見られず、飼育法を中心に解説されていた。以上のことから、『喚子鳥』はそれぞれの鳥に合った適切な飼育方法を知るための書物であったと考えられる。

ところで、この『喚子鳥』が刊行されてしばらく経った明和・安永(一七六四～八一)の頃、江戸では鶉合の再流行があり、優れた鳴き声のウズラは高値で取引が行われたという。^{七六}「嬉遊笑覧」には「凡鶉は鶯などの如く、よき鳥に付置いて音を学ばする事ならぬ^{七七}」とあり、ウズラは鶯などと違い鳴き声を教え込むことができず、その善し悪しのほとんどが遺伝で決まると記されている。優れた鳴き声のウズラが高値で取引されていたのはこのためであろう。また同書には、「近ごろ文政頃より、やうく巧みになりて、子を生ませて、よき種をそだつとかや^{七八}」と記されており、文政頃(一八一八～三一)から優秀な鳥をつがいで飼い、繁殖させることにより、より良い血統の鳥を育てることが行われていたようだ。『喚子鳥』には繁殖方法についての記述は確認できなかったが、ウズラの解説の最後に「お鳥にハすり糸を用ゆ^{七九}」とあることから、雛の飼育方法は確立しつつあったことが窺える。よって近世中期以降の飼育は、その鳥にあった適切な環境づくりを行い、繁殖させる

ことで優秀な血統を保つことが試みられていたと考えられる。

おわりに

本稿では「鶉目利問答書」と『鶉書』の差異を比較し関係性を探ること、そして近世に刊行されたウズラの飼育書を通して、ウズラに対する眼差しの変遷を描くことを目標として論を進めてきた。本稿で明らかにしたのは次の二点である。

第一に、管見の限り日本で最初に刊行された動物飼育書『鶉書』と写本「鶉目利問答書」の関係性について考察した。先行研究では、「鶉目利問答書」と『鶉書』は内容が類似しており、「鶉目利問答書」の後に『鶉書』が成立したとされていることから、「鶉目利問答書」は『鶉書』の草稿であると述べられているものの、内容分析や成立年次の同定が行われた上での論ではなかった。そこで、問答の内容、傷病に関する解説の二点を比較分析することにより、その真偽を検討することとした。まず、問答の比較では、「鶉目利問答書」にはなく『鶉書』にのみ見られる設問の存在について指摘し、周辺の問答と比較することで、「鶉目利問答書」に生じている記述の誤りや項目のずれが、『鶉書』では訂正されていることを明らかにした。傷病に関する項

目の比較では、両書で内容が共通する前半の項目において、『鶉書』が「鶉目利問答書」より丁寧な解説がなされていることを明らかにした。なお、「鶉目利問答書」にのみ見られる後半の項目が、『鶉書』には見られないことに関しては、重要性や信憑性が低い情報であったため『鶉書』の執筆の際に省かれた可能性を指摘した。以上から、「鶉目利問答書」を土台として『鶉書』が成立したと考えるとよいと結論付けられた。

第二に、近世を通して鳥の飼育がどのように変化してきたかについて検討した。近世初期に刊行された『鶉書』では、捕らえたウズラの優劣を見極めることに重点が置かれ、残りのほとんどは傷病の処置法について記されていた。一方、近世中期に刊行された『喚子鳥』は、餌の作り方や傷病の治療法、鳥の習性に合わせた住処の作り方など、飼育について『鶉書』よりも充実した解説がされていた。また雛の飼育法についても触れられており、繁殖も視野に入れた飼育が行われていたことが分かったが、その目的の多くは優秀な鳥同士を掛け合わせることにあり、より良い遺伝子を遺すためであった。

ところで、泉花堂三蝶により寛政一一年（一七九九）に刊行された『百千鳥』という飼育書がある。これも『喚子鳥』と同じく、様々な鳥について飼育するために必要な知識が

記された書物である。この序文からは、近世後期の人々の飼う鳥に対する思いの一端が窺える。

野鳥は霜雪そうせつに寒こへ、風雨ふうりゅうにもまれ一ツ口いちくちの水食すいじよくも、鶯う鷹たかの難なんを愁うれ嗚いする時は、木兎きと梟きょう袖そでの為ために心こころを痛いたむ。籠かご中ちゆうにてハ寒暑かんしよの苦くるミなし「中略」飼鳥かいてりも下手へたに飼かれ命いのちをちぢむ。是すくはを救すくん事を思おもひ一冊いつぽつを綴つづりぬ。ハ。

野鳥は寒さや雨風から逃れることはできず、餌や水に困り、換羽期の際には天敵に襲われる恐れもある。しかし籠の中で飼われる鳥にその心配はない。ただし下手に飼われれば命を縮めることになるため、そのような鳥を救うためにこの本を綴るのだという旨が記されている。『百千鳥』はまさに鳥を飼う人のため、そして飼われる鳥のために記された飼育書と言えるのではないだろうか。このような鳥に適した餌や住処を提供する飼育方法が、優れた鳥を掛け合わせることによって優秀な血統を遺すために開拓されたものであったとしても、『百千鳥』の著者のように、鳥のことを思うために鳥にとって良い環境を整えたいと思った人々がいることもまた事実であろう。

『鶉書』は近世初期の鶉合の流行に伴い刊行されており、鳴合に関する情報が重視されていることから、当時の人々

はウズラを鳴合するための道具であると考えていたのではないだろうか。そのため壊れたものを直すという感覚で、飼育法よりも傷病の治療法がより多く記されたと考えられる。それに対し、近世中期に刊行された『喚子鳥』は、鳥ごとに与えるべき餌や適した住処の作り方など、飼育法を中心に記されていた。つまり、『喚子鳥』ではウズラを道具としてではなく、命ある生き物として捉えるようになったと考えられる。

注

- 一 一般社団法人ペットフード協会「平成三〇年 全国犬猫飼育実態調査」、総務省統計局「人口推計（二〇一八年〈平成三〇年〉一〇月一日現在）」(<https://petfood.or.jp/data/chart2018/index.html>) 二〇二〇年一月九日取得。
- 二 「動物愛護に関する世論調査」平成一五年七月調査 (<https://www.stat.go.jp/data/jinsui/2018np/index.html>) 二〇二〇年一月九日取得。
- 三 兼平賢治『馬と人の江戸時代』、歴史文化ライブラリー 三九八、吉川弘文館、二〇一五年、根崎光男『犬と鷹の江戸時代』「犬公方」綱吉と「鷹將軍」吉宗、歴史文化ライブラリー 四二二、吉川弘文館、二〇一六年参照。
- 四 長谷川強「他」校訂『嬉遊笑覧』第五卷、岩波書店、

二〇〇九年、一四三頁。

五 滝沢馬琴『吾仏乃記』(細川博昭『大江戸飼鳥草紙 江戸のペットブーム』より孫引き)。

六 小島憲之「他」校注・訳『日本書紀』、新編日本古典文学全集、二、小学館、一九九四—一九九八年、一六九—一七〇頁。

七 細川博昭『大江戸飼い鳥草紙 江戸のペットブーム』、歴史文化ライブラリー 三九八、吉川弘文館、二〇一五年、四六頁。

八 前掲『大江戸飼い鳥草紙 江戸のペットブーム』、四七頁。

九 渡辺実校注『枕草子』、新日本古典文学大系 二五、岩波書店、一九九一年、一九四—一九五頁。

一〇 筆者意訳。以後、「」は全て筆者による。

一一 前掲『大江戸飼い鳥草紙 江戸のペットブーム』、四九頁。

一二 前掲『枕草子』、三七頁。

一三 永積安明、島田勇雄校注『古今著聞集』、日本古典文学大系 八四、岩波書店、一九六六年、五一—六頁。

一四 葉と枝。

一五 前掲『古今著聞集』、五一—五二〇頁。

一六 難波常雄「他」校『明月記』第二国書刊行会、一九六九年、九四頁。

一七 前掲『大江戸飼い鳥草紙 江戸のペットブーム』、五三頁。

一八 前掲『明月記』第二、四七—四九頁。

一九 文化三年条「新羅遣上臣大阿食金春秋等」、送博士小山中中臣連押熊「来、献孔雀一隻、鸚鵡一隻」(前掲『日本書紀』三、一六九頁)。

二〇 前掲『明月記』第二、五〇—五二頁。

- 二一 前掲『大江戸飼い鳥草紙 江戸のペットブーム』、五五頁。
- 二二 国書刊行会編『言継卿記』第三、統群書類従完成会、一九九八年、六四八頁。
- 二三 前掲『言継卿記』第三、三二六頁。
- 二四 前掲『大江戸飼い鳥草紙 江戸のペットブーム』、九八一—九九頁。
- 二五 朝倉治彦校注『人倫訓蒙図彙』、平楽寺「他」出版、一九九〇年（国立国会図書館蔵）、一五四頁。
- 二六 柴田光彦新訂増補『曲亭馬琴日記』第二卷、中央公論新社、二〇〇九—二〇一〇年、九二頁。
- 二七 前掲『大江戸飼い鳥草紙 江戸のペットブーム』、一〇二頁。
- 二八 前掲『大江戸飼い鳥草紙 江戸のペットブーム』、八二—八三頁、八五頁。
- 二九 前掲『大江戸飼い鳥草紙 江戸のペットブーム』、一四七—一四八頁。
- 三〇 前掲『大江戸飼い鳥草紙 江戸のペットブーム』、一〇六頁。
- 三一 前掲『曲亭馬琴日記』第一卷、六三頁。
- 三二 泉花堂三蝶『百千鳥』、柏原屋与左衛門「他」出版、一七九九年（国立国会図書館蔵）、一丁表から一丁裏。
- 三三 前掲『大江戸飼い鳥草紙 江戸のペットブーム』、九二—九四頁。
- 三四 前掲『嬉遊笑覧』第五卷、一四二—一四三頁。
- 三五 森川昭「他」校注『初期俳諧集』、岩波書店、一九九一年、一五二頁。
- 三六 大野洒竹編纂校訂『其角全集』、博文館、一八九八年、九六頁。
- 三七 前掲『嬉遊笑覧』第五卷、一四三頁。
- 三八 前掲『嬉遊笑覧』第五卷、一四三頁。
- 三九 前掲『嬉遊笑覧』第五卷、一四三頁。
- 四〇 蘇生堂主人『鶉書』、出版者不明、一六四九年（国立国会図書館蔵）、一丁表から二丁表。
- 四一 蘇生堂主人『喚子鳥』、須原屋茂兵衛、塩屋喜助、一七一〇年（国立国会図書館蔵）、二丁表から二丁裏。
- 四二 人見必大『本朝食鑑』（二六九七）や貝原益軒『大和本草』（一七〇九）。
- 四三 前掲『大江戸飼い鳥草紙 江戸のペットブーム』、一四四頁。
- 四四 松尾信一「他」校注『鶉書・犬狗養畜伝・既柵附飼方次第・牛書・安西流馬医巻物・万病馬療鍼灸撮要・解馬新書』、日本農書全集六〇、農山漁村文化協会、一九九六年、七一〇頁。
- 四五 『童子問』では孔孟の正指や学問の正道、『論語』についてなど、基礎知識の問答から始まり、その後『論語』と六経や孔孟の意義などより細かい解説に入っている。
- 四六 『体充問曰』、人間の心だてさま／＼ありて、をこなふところその品おほし。（中略）人間一生涯、いづれの道をか受容の業と仕るべく候や。師の曰、われ人のうちに、至徳要道といへる天下無双の靈宝あり。このたからを用て、心にまもり身におこなふ要領とする也。（中略）体充曰、さやうのたか

らはまことにもとめまほしき事に御座候へども、あまりに
 広大なる道なれば、われくが分にてはよびがたくおぼえ
 候。師の曰、それはあしき心得也。広大なるゆへに我人のを
 よぶことにて候」(山井湧「ほか」校注『中江藤樹』、日本思
 想体系二九、岩波書店、一九七四年、二二―二三頁)。

- 四七 前掲『鶉書』、九丁表。
- 四八 前掲『鶉書』、九丁表。
- 四九 前掲「鶉目利問答書」、一二丁表から一三丁表。
- 五〇 前掲『鶉書』、九丁表から九丁裏。
- 五一 前掲「鶉目利問答書」、一〇丁表から一〇丁裏。
- 五二 前掲「鶉目利問答書」、四丁表。
- 五三 前掲『鶉書』、五丁裏。
- 五四 前掲「鶉目利問答書」、一三丁裏。
- 五五 前掲「鶉目利問答書」、一三丁裏から一四丁表。
- 五六 「せけんにかしらさまくありといふとも老人はさやうの
 事一さいしらずひやうし色にほひあれハ上といふ」(前掲『鶉
 書』、一二丁表から一二丁裏)。
- 五七 前掲『鶉書』、犬狗養畜伝・厩柵附飼方次第・牛書・安西
 流馬医巻物・万病馬療鍼灸撮要・解馬新書、四三頁。
- 五八 前掲「鶉目利問答書」、一三丁裏。
- 五九 付録四の第七項、第一四項、第一九項参照。
- 六〇 前掲『大江戸飼い鳥草紙 江戸のペットブーム』、一四五
 一―一四六頁。
- 六一 貞享四年(一六八七)卯三月「生鳥類飼置候儀可為無用」、
 同年七月二日「何二而も生類売買仕間敷候、きりくす松虫

玉虫之類、慰二も飼申間敷由被渡候」(横田悠紀「近世日本
 における鼠の飼育書『養鼠玉のかけはし』(一七七五)・『珍
 断鼠育艸』(一七八七)を中心に」(熊本県立大学文学部日本
 語日本文学科卒業論文、二〇一四年三月)付録二より。

- 六二 前掲『喚子鳥』下巻、七丁裏。
- 六三 ワタムシか。アブラムシの一種。
- 六四 ボウフラの別称。
- 六五 エビヅルムシか。ブドウスカシバの幼虫。小鳥の餌とし
 て用いられる。
- 六六 前掲『喚子鳥』上巻、六丁裏。
- 六七 前掲『喚子鳥』上巻、七丁裏。
- 六八 前掲『鶉書』、一六丁裏。
- 六九 前掲『喚子鳥』上巻、六丁裏から七丁表。
- 七〇 前掲『鶉書』、一三丁裏から一四丁表。
- 七一 前掲『鶉書』、一四丁表。
- 七二 前掲『鶉書』、一四丁裏。
- 七三 前掲『喚子鳥』上巻、七丁裏。
- 七四 前掲『鶉書』、一五丁表。
- 七五 前掲『喚子鳥』下巻、七丁裏から八丁表。
- 七六 前掲『嬉遊笑覧』第五卷、一四三頁。
- 七七 前掲『嬉遊笑覧』第五卷、一四三頁。
- 七八 前掲『嬉遊笑覧』第五卷、一四三頁。
- 七九 前掲『喚子鳥』下巻、八丁表。
- 八〇 前掲『百千鳥』、一丁表から一丁裏。